

小学校における社会的スキル教育を組み込んだ教科教育

塗師 斌・平石 聡子

School Subject Education Introducing Social Skills Education in the Elementary School

Akira NUSHI・Satoko HIRAISHI

1. 小学校入学前の園児の社会的スキルと小学校における社会的スキル教育の重要性

社会的スキルとは、心理学辞典（中島他編，1999）における相川充の定義によれば、狭義には「対人場面において相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人行動」のことである。社会的スキルは生まれつきのものでなく、経験によって学習されるものである。その基盤は、生後の親、きょうだい、近隣の遊び仲間等との日常的な対人場面の諸経験を通して、獲得されていくものである。しかし近年、少子化、核家族化、情報化による遊びの変化（例、個人化したテレビゲーム）や減少等によって、対人場面の諸経験の機会が乏しくなっている。そのような社会的スキルの基盤のない子どもが否応なく小学校の学級集団に入れられると、たとえば、「仲間入りができなくて孤立している」、「すぐキレたり怒り出す」、「泣き出すととまらない」、「自分の言いたいことがいえない」等の事態が生じ、高じて不登校やいじめ、校内暴力等の問題が生ずるのはむしろ当然のことといえよう。

AERA(2005)が全国の保育園・幼稚園から無作為に抽出した215園を対象にした調査結果によれば、特に小学生の社会的スキルと関連が強いと思われる以下の項目に対して「はい」と答えた園の数は次のとおりである。

- ・登園時に「おはようございます」の挨拶ができなかったり、食事中に立ち歩いたりするなど、日常の基本的なことができない子が増えている。(120園)
- ・クラス活動をしているときに突然立って走り回ったり寝転がったり、先生の話を受けなかったりするなど落ち着きのない子どもが増えている。(105園)
- ・集団遊びをしているときに、ルールがわかっているにもかかわらず守れない子どもが増えている。(103園)
- ・他の子のおもちゃを横取りしたり、遊びを邪魔したりするなど、自己中心的な子どもが増えている。(98園)
- ・先生や他の子どもに対して、乱暴な言葉を使ったり、噛んだりたたいたりなどの攻撃的な行動をする子どもが増えている。(90園)
- ・友達同士で遊んでいるときに、一人で違う遊びをするなど、友達とかかわることの苦手な子が増えている。(89園)
- ・子どもが親の顔色をうかがったり、親の前でもいい子でいるなど、親と子の関係がうまくいっていない様子が見られることが多い。(80園)

- ・自分の要求が通らないときなど、何かあるとすぐに「パニック」状態になる子どもが増えている。(76園)

以上の結果をまとめると、現代の園児には「挨拶やすわって食事するなどの基本的な生活習慣を身につけておらず、集団の中では落ち着きがなく、友達とかかわることが苦手一人で違う遊びをしたり、自己中心的で、ルールを守れず、攻撃的で、すぐパニック状態になる」という傾向が明確に見られるということになる。これらはいずれも社会的スキルに関連するものであり、現代の園児の社会的スキルが極めて憂慮すべき状態にあることを示している。もちろん園児といっても年齢幅があり、また小学校入学前の発達段階における結果であるから、小学校に入れば自然に改善されるという見方もあろうが、調査項目のほとんどが「・・・増えている」となっていることを考慮すれば、園児の社会的スキルが未熟な方向に確実に変化してきているのである。この背景には先に述べたような少子化、核家族化、情報化による対人場面の諸経験の減少といった社会的変化が考えられよう。その中でもとりわけ親子関係による影響が大きいと思われる。AERA(2005)の調査結果でも、215園中、「朝食を食べてこなかったり夜遅くまで起きているなど不規則な生活をしている子どもが増えている」に対して174園、「子どもが親の顔をうかがったり、親の前でもいい子でいるなど、親と子の関係がうまくいっていない様子が見られることが多い」に対して80園が「はい」と答えており、こうした家庭での不規則な生活習慣や親の教育力の低下が、社会的スキルの未熟さに影響を与えていることを示唆している。

このような園児たちが小学校に入学し学級集団に送り込まれたとき、受け入れる学校側が特別な配慮をせず、従前と同様な指導体制のままでは、うまくいかないのは当然であろう。それこそ不登校、いじめ、学級崩壊等を招くことは目に見えている。子どもは変わってきているのである。特に社会的スキルの未熟さという方向での変化は著しく、それをしっかり踏まえたいうえでの小学校での指導体制が必要なのである。

小学校教育において、こうした社会的スキルの獲得、矯正、開発といった社会的スキル教育を扱うのは、主として「道徳」や「特別活動」の時間であろう。「総合的な学習」も取り上げる内容(たとえばアサーション・トレーニング)によっては、社会的スキル教育を扱うことになる。実際に、一部の小学校で行われている社会的スキル教育は、ほとんどが「道徳」、「特別活動」あるいは「総合的な学習」の時間を利用している。しかしこのような時間だけの社会的スキル教育で、はたして小学生に社会的スキルをしっかりと身につけさせることができるのだろうか。その時間の単なる「勉強」ということだけにならないだろうか。学習した社会的スキルの般化や維持を考えれば、教科教育の時間においても社会的スキル教育を組み込んで行う必要があるのではないだろうか。その方が教科教育という点でもいろいろメリットがあるのではないだろうか。これが本研究の問題意識であり、その検討が本研究の目的である。

そこで本研究ではまず第2章で、現行の小学校学習指導要領を、小学生の社会的スキルという観点から総覧していく。最初に社会的スキル教育と最も関係が深いと思われる、「道徳」と「特別活動」、次に「国語」、「生活科」、「体育」、「算数」等の「各教科」の学習指導要領を社会的スキルという観点から関連部分を取り上げて見ていく。これを通して、「道徳」と「特別活動」だけでなく、「各教科」においても社会的スキル教育を組み込むことが十分可能であることを示す。

次に第3章では、現状として小学生を対象とした社会的スキル教育の研究がどのように行われているか、そしてどのような改善点があるかについて述べる。具体的には、社会的スキル教育の中で

も小学校の学級場面で最も適用性が高いと思われる集団社会的スキル訓練に関する先行研究を説明するとともに、その問題点及び改善点を指摘する。

そして第4章では具体的に「算数」を取り上げて、社会的スキル教育を組み込んだ教科教育の実例を示す。

最後に第5章ではまとめを行うとともに、教科教育に社会的スキル教育をもっと組み込む必要性があることを提言する。

2. 小学校学習指導要領における社会的スキル

平成10年7月の教育課程審議会の答申では、完全学校週5日制の下、各学校が「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、児童に「生きる力」を育成することを基本的なねらいとし、4つの方針が提言されているが、そのうちの1番目が、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」である。ここで「社会性」が取り上げられているのは、今日の子どもの現状を踏まえたとき、その育成が最重要課題の一つであるという認識を反映するものであろう。このことは、社会的スキルが「社会性」の重要な要素であることを考えれば、「社会的スキル教育」をもっと活用して「生きる力」の育成を図るべきであると提言していると受け止めることもできよう。

以下、この教育課程審議会の答申を受けて改定された現行の学習指導要領を、社会的スキルという観点から、関連部分を取り上げて見ていく。

2.1 「道徳」の学習指導要領における社会的スキル

「道徳」教育の「目標」は、「学校の教育全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」であるが、「道徳性」は「社会性」と密接な関連があることから、社会的スキルに関連した記述が「道徳」の学習指導要領に非常に多く含まれている。「道徳」の学習指導要領には4つの内容があるが、そのうち次の2つ、すなわち「主として他の人とのかかわりに関すること」と「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の内容は、社会的スキルと非常に関連が強い。たとえば第1学年及び第2学年の「主として他の人とのかかわりに関すること」には「(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。(2) 身近にいる幼い人や高齢者に温かい心で接し、親切にする。(3) 友達と仲よくし、助け合う。(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する」が含まれており、同様な内容が第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年の「主として他の人とのかかわりに関すること」の中で、発達段階に対応した表現で記述されている。これらを読み物や知識を通してではなく、集団の中での「活動」や「体験」を通して学んでいくのが、社会的スキル教育なのであり、その意味で「道徳」教育と社会的スキル教育は非常に関連が強いといえる。

2.2 「特別活動」の学習指導要領における社会的スキル

「特別活動」の「目標」は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」ということであるから、目標自体が社会的スキルと関連が強いことがわかる。次に「内容」を見ると、「学級活動」においては「学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理など」や「望ましい人間関係の育成」、「児童会活動」におい

ては「学校の全児童をもって組織する児童会において、学校生活の充実の向上のために話し合い、協力してその解決を図る活動を行うこと」、「クラブ活動」においては「同好の児童をもって組織するクラブにおいて、共通の興味・関心を追求する活動を行うこと」、「学校行事」においては「集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと」といった社会的スキルと密接に関連した記述が見られる。

以上のように、「特別活動」は「望ましい集団活動」、「集団の一員としての自覚」、「集団への所属感」等を目標として「活動」を行うという点で、社会的スキルとの関連が強く、特に「学級活動」は社会的スキル教育を行うのに適した時間であるといえよう。

2.3 「国語」の学習指導要領における社会的スキル

平成10年7月の教育課程審議会の答申における国語科の改善の基本方針は以下のように述べられている。「小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育としての立場を重視し、国語に対する関心を高め国語を尊重する態度を育てるとともに、豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る。特に、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。」(文部省, 1999aより引用)

これを受けて、現行の小学校指導要領の国語科では、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う能力の育成を重視して、新たに「伝え合う力を高める」ことが目標に位置付けられている。ここでの「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりする力」(文部省, 1999a)である。またこの能力を育成することを意図して、「話すこと」と「聞くこと」を1領域としてまとめている。そしてこの「話すこと・聞くこと」が、2学年単位で第1学年から第6学年まで系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返して学習できるようになっている。たとえば第1学年及び第2学年の「目標」の(1)は、「相手に応じ、経験した事などについて、事柄の順序を考えながら話すことや大事な事を落とさないように聞くことができるようにするとともに、話し合おうとする態度を育てる」ことであるのに対し、第5学年及び第6学年の「目標」の(1)は「目的や意図に応じ、考えた事や伝えたい事などを的確に話すことや相手の意図をつかみながら聞くことができるようにするとともに、計画的に話し合おうとする態度を育てる」というように、発達段階を踏まえた目標となっている。また「内容」について、たとえば第1学年及び第2学年の「A 話すこと・聞くこと」では「ア 知らせたい事を選び、事柄の順序を考えながら、相手に分かるように話すこと」、「イ 大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと」、「ウ 身近な事柄について、話題に沿って、話し合うこと」といった、社会的スキルと非常に関連の強い事項が挙げられている。

以上のように、現行の学習指導要領では「伝え合う力を高める」ことが重視されるようになったわけであるが、この「伝え合う力」はまさに社会的スキル教育、その中でもとりわけ主張性訓練、あるいはアサーショントレーニング(平木, 1993)がその育成を目指しているものである。したがって、「国語」における「話すこと・聞くこと」は社会的スキル教育と重なる部分がかなり大きいと考えられる。このことは、「話すこと・聞くこと」という「国語」の教科教育への、社会的スキル教育の適用可能性が非常に大きいことを示すものである。

2.4 「生活」の学習指導要領における社会的スキル

「生活」の「目標」は「自然な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」ということであるから、「目標」自体が社会的スキルと関連が強い。「各学年の目標及び内容」においても以下のように社会的スキルと密接に関連した記述が多く見られる。

- ・集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようにする。
- ・身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。
- ・自分たちの生活は地域の人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみを持ち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。
- ・遊びを工夫し、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。

小学校指導要領解説生活編（1999b）によれば、平成10年の改定の際の改善の基本方針の第1は、「児童が身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を一層重視すること」であり、その際「今日の児童は人とのかかわりが希薄化していることから、特に、児童を取り巻く多様な人々とのかかわりを重視」している。

以上のことから、「生活」は社会的スキル教育の適用可能性が大きい教科といえよう。また「生活」を学ぶ学年が第1学年及び第2学年であることを考えれば、その必要性が大きいと考えられよう。

2.5 「体育」の学習指導要領における社会的スキル

「体育」の「各学年の目標及び内容」には、以下のように社会的スキルと関連した記述が数多く見られる。（以下、・・・は中略を示す）

第1学年及び第2学年

「目標」の「(1) 基本の運動及びゲームを簡単なきまりや活動を工夫して楽しくできるようにする・・・」および「(2) だれとでも仲よくし・・・」はいずれも社会的スキルと関連が強く、「内容」の「順番やきまりを守って仲よく運動・・・」(A基本の運動)、「規則を守り、互いに仲よくゲームを行い、勝敗を素直に認めることができるようにする」(Bゲーム)、「ゲームを楽しむための簡単な規則を工夫することができるようにする」(Bゲーム)といった項目内容はいずれも社会的スキルと関連がある。

第3学年及び第4学年

「目標」の「(2) 協力、公正などの態度を育てる・・・」は社会的スキルと関連が強く、また「内容」の「順番やきまりを守って仲よく運動・・・」(A基本の運動)、「規則を守り、互いに協力してゲームを行い、勝敗を素直に認めることができるようにする」(Bゲーム)、「互いに励まし合って運動・・・」(C器械運動)、「互いに協力して水泳・・・」(D水泳)、「みんなで踊りを楽しむことができる・・・」(E表現運動)、「互いのよさを認め合い、協力して練習や発表ができる」(E表現運動)等の項目内容はいずれも社会的スキルと関連がある。

第5学年及び第6学年

「目標」の「(2)協力、公正などの態度を育てる・・・」という箇所については第3学年及び第4学年と同様である。また「内容」には「互いに協力して、運動ができるようにする」(体づくり運動)、「互いに協力して運動・・・」(器械運動)、「互いに協力して安全に練習や競争ができるようにするとともに、競争では、勝敗に対して正しい態度がとれるようにする」(C陸上運動)、「互いに協力して水泳・・・」(D水泳)、「互いに協力し、役割を分担して練習やゲームができるようにする」(Eボール運動)、「互いのよさを認め合い、協力して練習や発表ができるようにする」(F表現運動)等の社会的スキルと関連した項目が含まれている。

以上のように、「体育」の学習指導要領には社会的スキルと関連した項目が多く含まれ、しかも「運動」や「スポーツ」、「ゲーム」等を通して行えるという点で、「体育」は社会的スキル教育の適用可能性が大きい教科といえよう。

2.6 「算数」の学習指導要領における社会的スキル

「算数」の学習指導要領にはこれまでに述べてきた「道徳」、「特別活動」、「国語」、「生活科」、「体育」に見られるような、社会的スキルと直接的に関連した記述は含まれていない。しかし社会的スキル教育は学習内容だけではなく、学習活動形態とも密接に関連するものである。その観点から考えると、「算数」の「目標」である「数量や図形についての算数的活動を通して、基礎的な知識と技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考える能力を育てるとともに、活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活に生かそうとする態度を育てる」の中の「算数的活動」の活動形態の工夫次第によって、社会的スキル教育を組み込むことが十分に可能であると考えられる。ちなみに「算数的活動」というのは、小学校指導要領解説算数編(文部省, 1999c)によれば、平成10年の改訂で新たに用いられるようになった言葉であり、これを積極的に取り入れることによって、算数の授業が「児童の主体的な活動が中心となるものへと転換」され、「分かりやすい学習となったり、実生活での活動と算数との関連が明らかになったりするとともに、算数の楽しさやよさが感じられ、感動のある学習ともなっていくだろう」とされている。なお本研究の第4章で取り上げる「社会的スキル教育を取り入れた教科教育」の実例は、まさにこの「算数的活動」の活動形態を工夫して集団SSTを組み込んだものとみなすことができる。

2.7 その他の教科における社会的スキル

前節までに取り上げてきた教科以外のその他の教科、すなわち「社会」、「理科」、「音楽」、「図画工作」、「家庭」の学習指導要領では、「算数」と同様、社会的スキルと直接的に関連した記述は含まれていない。しかし前述したように、社会的スキル教育は学習内容だけではなく、学習活動形態とも一体となったものである。その観点から考えると、「社会」では観察、調査、見学など、「理科」では観察、実験など、「家庭」では「衣食住などに関する実践的・体験的な活動」における学習活動形態の工夫により社会的スキル教育を組み込むことが十分に可能であると考えられる。また、「音楽」と「図画工作」に関しては、日常的な授業場面である「表現及び鑑賞の活動」の中に取り込むことが可能であろう。特に、「音楽」では合唱、合奏、「図画工作」では学習指導要領の「内容の取扱い」でも示されている「共同してつくりだす活動」において社会的スキル教育を組み込みやすいのではないかと考えられる。

以上、「道徳」、「特別活動」、「各教科」のすべてについて学習指導要領における社会的スキルに関連した記述を取り上げて見てきた。その結果、社会的スキルに関連した記述が最も多いのは「道徳」と「特別活動」といえよう。これは、「社会性」が「道徳性」あるいは「集団活動」と関連が深いことから当然のことといえる。実際、従来の社会的スキル教育の多くは、「道徳」あるいは「特別活動」の時間に実施されてきており、これらの時間は社会的スキル教育を組み込むのに最も適した時間といえる。

教科の中で社会的スキルと最も関係が強いのは「国語」である。特に学習指導要領の改定で、新たに「伝え合う力を高める」ことが目標に位置付けられたことから、社会的スキルとの関係が非常に強くなったといえる。「生活」、「体育」の学習指導要領にも、社会的スキルに関連した記述が多く見られる。したがってこれらの教科の時間も社会的スキル教育を取り入れやすい。

その他の教科、すなわち「算数」、「社会」、「理科」、「音楽」、「図画工作」、「家庭」の学習指導要領には直接的に社会的スキルに関連した記述はあまり見られないが、全般的に「活動」や「体験」、「調査」、「観察」、「実験」、「調べ」等が重視されており、こうした学習活動形態の工夫（たとえばグループ学習）によって社会的スキル教育を組み込むことが十分に可能であると考えられる。

3. 小学生の社会的スキル教育の先行研究と改善点

小学生を対象にした社会的スキル教育において、今日注目されているのは学級を1つの単位として実施する集団社会的スキル訓練（classroom-based social skills training；以下、集団SSTと略記する）である。集団SSTは、少子化や核家族化、地域社会の変容などを受けて、最近では予防的・発達的な観点から、学級に在籍するすべての子どもに対して社会的スキルの学習機会を意図的に提供しようとするものである（金山・佐藤・前田，2004）。集団SSTの利点について相川（2000）は、①複数のモデルを呈示できる、②実践的リハーサルの機会が提供しやすい、③トレーナーだけでなくほかのメンバーからもフィードバックを受けられる（トレーナーからのフィードバックよりも信憑性や価値が高いことがある）、④般化に都合のよい人的環境を整えられる、⑤一人一人実施するのに比べて効率的である、ということを挙げている。以上のように、集団SSTは、発達段階に応じて社会的スキルが適切に獲得できている子どもにとっては、予防や確認の意味で有効である。そして、社会的スキルが未発達で配慮が必要であると思われる子どもにとっては、多くのモデリングを目の前にして、自分がどのように振舞っていけばいいか学習できるし、さらに、活動の中で自分が適切に行動できているところを学級の仲間に見てもらい、受容してもらおうという意味で重要なトレーニングであると考えられる。

集団SSTの実践例として、例えば後藤・佐藤・高山（2001）は、小学校2年生のクラスを対象として、「積極的な聞き方」、「好意的な言葉による働きかけスキル」、「感情を分かち合う（共感する）ことに関わるスキル」というターゲットスキルを選択し、1名の訓練者が1セッション15～45分として学級単位で集団SSTを6セッション実施した。集団SSTの実施後、「向社会的スキル」得点が上昇しており、このスキルに関しては集団SSTの効果が認められた。

さらに、藤枝・相川（2001）は、小学校4年生を対象に、「なかまへの入り方」、「なかまのさそい方」、「やさしい言葉かけ」、「あいてを思いやる」、「じょうずなあなたのみ方」、「あたたかいことわり方」というターゲットスキルを設定し、学級活動の時間に集団SSTを行った。ここでの目的は、集団SSTが社会的スキルの程度の低い児童の社会的スキルの上昇に及ぼす効果を実験的に検証することであった。その結果、ターゲットスキルの児童自己評価のうち、「じょうずなあなたのみ方」スキルと

「あたたかいことわり方」スキルが上昇した。また教師評定においては、全集団SST終了後では、どの因子においても集団SSTの効果が認められた。

これらの集団SSTに関する研究では、一定の効果を得られてはいるが、集団SST後の般化・維持の問題や、集団SSTを行う際の教師の負担、さらには集団SSTへの児童の参加意欲の向上などを考慮すると、改善されうる点があるのではないかと考える。

まず、般化・維持の問題においては、集団SSTの実施場面が重要であると考えられる。従来の集団SSTは、道徳の時間や学級活動の時間に特別な時間をとっていると考えられる。しかし、そのような授業時間に集団SSTを実施すると、児童の多くは普段とは異なった特別な場面であるという感情を抱くだろう。また、道徳の時間や学級活動の時間は、社会的スキルを獲得することのみが目的となり、訓練ということが強調されるのではないかと考えられる。訓練ということが強調されれば、児童の中には嫌悪感を抱いたり、またその場だけでやっておけばよいという意識が生じるかもしれない。このような訓練に対するネガティブな感情を抱いてしまうと、集団SSTで獲得を目指したスキルが、行動レベルで般化さらには維持されにくくなってしまふということが考えられる。これらを考慮すると、子どもたちにとって、学校におけるより日常的な場面で集団SSTを実施するほうが般化・維持に対してより効果的であると考えられる。学校における日常場面の中で、自然にスキルを身につけることが可能であれば、集団SST実施後の日常の場面でも、そのスキルを使用して対人関係を築くことができるのではないだろうか。本研究では、子どもたちにとっての学校における日常場面とは、教科教育の時間であると捉えている。子どもたちが学校で多くの時間を過ごすのは教科教育の時間である。その中では当然、「相手の話を聴く」スキルや「自分の発表をする」スキル、「相手を賞賛する」スキルなど、対人関係を築く上で最も基本的である社会的スキルが頻繁に使用されている。よって、教科教育の授業の中での仲間との相互交渉場面において、社会的スキルの獲得手順を適切に提示し、それを実行していくことができれば、子どもたちは社会的スキルの学習場面をより多く持つことができると考えられる。したがって、児童の社会的スキルの発達を考慮すると、道徳や学級活動の時間のみならず、教科教育においても集団SSTを実施することがより効果的であると思われる。

次に、集団SSTを教科教育に適用することで、教師の負担も軽減されることが考えられる。今日の学校現場は、いじめ、不登校、校内暴力など、多くの問題を抱えている。その上、教師は学校経営に関する雑務をも抱え、その仕事は枚挙に遑がない。その中で、教師は子どもたちの教科教育のみならず、近年では生活指導にも今まで以上の労力をかけなければいけないという現状である。このような現状を考慮すると、教科教育と生活指導とを一度に実行することができれば、教師の普段の職務の負担を軽減することができるのではないかと考える。集団SSTを実施するための特別な時間を設けなくても、日常行っている教科の場面で実施できる集団SSTのデザインを考案することができれば、容易に何度も実施が可能であるので、より学校現場に即しているということができないだろうか。したがって、教師にとっても、日常の教科教育の場面に導入できるような集団SSTのプログラムを作成することが望まれていると考えられる。

4. 社会的スキル教育を組み込んだ算数教育

前章でみてきたように、従来の集団SSTは主に道徳や特別活動、総合的な学習の時間で行われてきた。しかし、般化・維持をより促進させるという点で、社会的スキル教育を教科教育の場面にお

いても実施することの重要性を述べた。ここでは、実際に集団SSTを教科教育の中でも算数に適用した実践例を提示し、その有効性について考察していく。

算数の学習指導要領の中には、道徳や特別活動の中にあるような社会的スキルと関連する記述は見当たらない。しかし、活動形態などを工夫することで社会的スキル教育が十分可能であると考え、本研究では算数で行う集団SSTのプログラム（MSST）を提示し、その可能性を検証したい。

平石（2005 a）及び平石・塗師（2005 b）は、集団SSTを算数の授業に組み込んで計画し、学級全体の社会的スキルの変化及び学級の中でも対人場面においてうまく仲間入りできない対象児4名にもたらす効果を詳細に検討した。これらの対象児は集団SSTを実施した小学校の全児童対象の放課後育成事業（以下、Hスクールと略記する）に参加している児童である。実験者はHスクールに2年半携わっているため、児童の詳細を熟知している。ここでの集団SSTは、小学校1年生2学級計62名に、「協動的なグループ活動に参加する」スキルをターゲットとして、4セッションの集団SSTを行った。効果測定として、実施前及び実施後に児童による自己評価、Hスクールのアシスタントによるアシスタント評価を行い、その変化を見た。また、実施前、途中、一週間後、6ヶ月後において対象児4名の自由遊び場面における対人交渉時の行動をビデオに録画し、対人交渉場面における児童の行動の変化を分析した。

(1) 算数の選定理由

算数を選定した理由は、活動の最終的な目標が明確（答えが1つに決まってくる）であるから、①児童にとっては、グループで協調的な活動を行いやすい（例えば、4人で1つの目標を達成しようとすることができる）、また、②教師にとっては、授業内容の達成と、集団SSTの理論を同時に扱いやすい、という2点が挙げられる。

また、単元については、小学校第1学年の「かたちあそび」を取り上げた。その選定理由は、以下の3点が挙げられる。①算数の学習内容で、グループ活動として取り入れられるもの、②グループのメンバーと楽しく学習して、他者との交渉自体にポジティブな感情を抱くことのできるもの、③学習目標とターゲットスキルの両方を獲得できやすいものである。このような単元を選定することで、授業内容の達成と社会的スキル獲得が同時に行いやすいと考えられる。また、「かたちあそび」は算数の中でも足し算や引き算のようにそこまで難しいものではなく、児童各々の学習進度にほとんど差がないものであるだろう。図形という具体物を扱うことで、児童たちはほとんどつまづくことなく、遊び感覚で楽しみながら授業を受けることができると考えられる。

(2) 学習目標及びターゲットスキルの設定

ターゲットスキルは、「協調的なグループ活動に参加する」スキルを取り上げ、その下位スキルとして表1にあるような4つのスキルを選定した。学習指導案を作成する際には、まず学習目標を設定した。これは、小学校学習指導要領解説算数編を参考に目標を決定し、活動内容を考案した。その後、その学習活動が達成されるために使用する社会的スキルの獲得段階を小林・相川（1999）および子どものコミュニケーション研究会（2003）を参考に決定した。

表1 学習目標とターゲットスキル及び獲得段階

	学習目標	ターゲットスキル及び獲得の段階
第1セッション	簡単な形をとらえ、身の回りのものの形の中から基本図形を見つけようとする。	【友だちにお願いする】 ① お願いする友だちの顔を見る。 ② 友だちに優しくお願いする。 ③ お願いを聞いてくれたら「ありがとう」と伝える。
第2セッション	丸、三角、四角の色画用紙を使って、1つの絵になるように構成する。	【友だちの話を聴く】 ① 静かにして、話をする友だちのほうを向く。 ② 友だちの話を促す。 ③ 友達の話した言葉の一部を繰り返す簡単な反射を行う。
第3セッション	点と点をつなぎ、丸、三角、四角を用いて、1つの作品を作る。	【自分の話をする】 ① 友だちを見渡す。 ② 友だちに聞こえるような大きな声で話す。 ③ ルールに従って、発表内容を友だちに伝える。
第4セッション	線や色画用紙を用いて、丸、三角、四角を多様に使い、形を構成することが出来る。	【友だちを賞賛する】 ① 賞賛する友だちのほうを向く。 ② ルールに従って、友だちを賞賛する。 ③ 拍手を送る。

(3) 活動形態について

活動形態はグループ活動を選定した。グループのメンバー数は、対象が小学校1年生という発達段階を考慮し、また、小学校の教務担当教諭と検討した結果、1グループ4名とした。グループのメンバーの内訳は、それぞれのクラス担任と検討した結果、クラスの中でも社会的スキルが発達しており、クラスのリーダー的存在、クラスメイトから模範にされるような児童と、社会的スキルが未発達で、日頃の生活や授業中に特に配慮が必要な児童を抽出し、1グループにそれぞれ最低1名含まれるように設定した。その理由として、クラスメイトから模範にされるような児童が、社会的スキルの未発達である児童のモデリングになることを意図したからである。

グループ内では、児童に1番から4番までの番号を割り当て、活動が行われやすくなるように考慮した。その際、1番は社会的スキルがグループの中で最も備わっていると思われる児童を割り当て、4番には社会的スキルがグループの中で最も備わっていないと思われる児童を割り当てた。1番の児童が4番の児童のモデリングになるように配慮し、活動は常に1番の児童から開始されるように設定した。

以上のような設定にすることで、社会的スキル獲得を促進するだけでなく、学習目標の達成における効果も促進されると考えられる。グループ活動を行う中で、グループのメンバーと学習内容の確認をすることができるし、またお互いの意見を交換し、各々の考えを深め合うこともできるだろう。さらに、今回は社会的スキルが発達している児童とそうでない児童を組ませたので、発達している児童がそうでない児童をフォローし、自然に児童たち自身で協力し合う場面が出てくると考えられる。教科教育に集団SSTを適用する場合、このような学習面での効果も期待できるような活動形態を考案することが重要であろう。

(4) 学習指導案の概要

授業全体の設定として、小学校1年生が対象であるので、参加意欲を高めるためにH学園という忍者になるための学園で、社会的スキル（ここでは「術」として提示）を獲得しながら卒園を目指すという活動にした。術獲得のためには、「お約束」という3段階の獲得基準が設定してある。詳細は平石（2005 a）及び平石・塗師（2005 b）を参照されたい。

ここでは第3セッションの学習指導案を示す（図1 a 及び図1 b）。

<p>+</p> <p>第1学年 算数科学習指導案（略案）</p>									
1. 日時	平成16年11月24日（水）								
2. 学年・組	第1学年1組・2組								
3. 指導者	第1学年1組・2組の担任教諭、平石 聡子								
4. 活動場所	第1学年1組・2組の教室およびフリースペース								
5. 单元名	「かたちあそび」～友だちとなかよく図形に親しもう～								
7. 单元目標	具体物の観察や色画用紙による形の構成などの操作を通して、平面図形に親しみ、その理解の基礎となる経験を豊かにする。								
8. 本時目標	<p>【学習目標】 点と点を線でつなぎ、「まる」、「さんかく」、「しかく」を用いて、一つの作品を作る。</p> <p>【獲得するスキル】 ◎自分の話をするスキル</p> <p>【スキル獲得のルール※①】 ①グループのお友だちを見渡す。 ②お友だちに聞こえるような大きな声で話す。 ③ルールに従って、発表内容をお友だちに伝える。</p>								
9. 本時の学習展開	<table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">子どもの活動と主な指導内容</th> <th style="width: 50%;">活動への支援</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> 1. 前時の活動を振り返る。 ・「まる」、「さんかく」、「しかく」を用いて、いろんなものを構成できるということを復習する。 2. 点と点を線で結んで、一つの絵を完成させる。 </td> <td> ○「まる」「しかく」「さんかく」を組み合わせて、ひとつのものが構成されていることを確認する。 </td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;"> <p>～Hがくえん3かいめ みんなにじまんしようのまき～ みてみて！すごいでしょ？のじゅつ</p> </td> </tr> <tr> <td> ・一人一人が順番に指令書ボックスから指令書を受け取りに行く。 ・指令書をグループに持ち帰り、その内容をメンバーに伝える。 ・指令書どおりに、一人一人点と点を結んで、一つの作品を完成させる。 </td> <td> ○活動のルールを黒板に提示する。 ○グループをまわって、ルールにそって活動が行われるように、助言する。 ○自分の作品をグループのメンバーに発表できるようにルールを促す。 </td> </tr> </tbody> </table>	子どもの活動と主な指導内容	活動への支援	1. 前時の活動を振り返る。 ・「まる」、「さんかく」、「しかく」を用いて、いろんなものを構成できるということを復習する。 2. 点と点を線で結んで、一つの絵を完成させる。	○「まる」「しかく」「さんかく」を組み合わせて、ひとつのものが構成されていることを確認する。	<p>～Hがくえん3かいめ みんなにじまんしようのまき～ みてみて！すごいでしょ？のじゅつ</p>		・一人一人が順番に指令書ボックスから指令書を受け取りに行く。 ・指令書をグループに持ち帰り、その内容をメンバーに伝える。 ・指令書どおりに、一人一人点と点を結んで、一つの作品を完成させる。	○活動のルールを黒板に提示する。 ○グループをまわって、ルールにそって活動が行われるように、助言する。 ○自分の作品をグループのメンバーに発表できるようにルールを促す。
子どもの活動と主な指導内容	活動への支援								
1. 前時の活動を振り返る。 ・「まる」、「さんかく」、「しかく」を用いて、いろんなものを構成できるということを復習する。 2. 点と点を線で結んで、一つの絵を完成させる。	○「まる」「しかく」「さんかく」を組み合わせて、ひとつのものが構成されていることを確認する。								
<p>～Hがくえん3かいめ みんなにじまんしようのまき～ みてみて！すごいでしょ？のじゅつ</p>									
・一人一人が順番に指令書ボックスから指令書を受け取りに行く。 ・指令書をグループに持ち帰り、その内容をメンバーに伝える。 ・指令書どおりに、一人一人点と点を結んで、一つの作品を完成させる。	○活動のルールを黒板に提示する。 ○グループをまわって、ルールにそって活動が行われるように、助言する。 ○自分の作品をグループのメンバーに発表できるようにルールを促す。								

図1 a MSSTの学習指導案例（第3セッション）

<ul style="list-style-type: none"> ・グループ全員が完成したら、発表ルールに従って、グループのメンバーに自分の作品を発表する（「私は〇〇ができました。」など）。 <p>3. 本時の活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「まる」、「さんかく」、「しかく」を線で描いて、一つの形を構成できることを確認する。 ・ワークシートで、今日の活動を振り返る。 	<p>〇線をつなぎ合わせ、「まる」「さんかく」「しかく」を作って、一つの形を構成できることを確認する。</p>
<p>10. 本時活動の評価規準</p> <p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力して、「まる」、「さんかく」、「しかく」を線で描き、絵を完成させようとする。 <p>【数学的な考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・線で「まる」「さんかく」「しかく」を描くことができる。 <p>【表現・処理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「まる」、「さんかく」、「しかく」を線で描き、一つの絵を構成することができる。 <p>【知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものの形は、「まる」「さんかく」「しかく」の基本図形の組み合わせによって構成されていることがわかる。 <p>【スキル獲得規準】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループのメンバーを見渡して、聞こえるような大きな声で自分の発表ができる。 ・発表するときのルール（※①）にそって、聞くことや話すことができる。 	

図1b MSSTの学習指導案例（第3セッション）

(5) MSSTの結果及び考察

MSSTによる社会的スキルの変化をみるために、児童の社会的スキルの自己認知評定及び他者認知評定、さらにHスクールのアシスタントによる評定を行った。その結果、いずれの評定においてもMSST前後における社会的スキルの差が有意または有意傾向を示す結果となった。したがって、MSSTが児童の社会的スキルの向上に影響を与えたということが示唆されたといえよう。

さらに、対象児4名に対しては、自由遊び場面の行動分析を行った。対人交渉時間においては、対象児4名においてMSSTの実施一週間後のみならず、6ヵ月後においても、維持されていることが明らかとなった。また、接した友人の延べ人数、接した友人の人数（同一人物なら1カウント）においては、対象児のうち2名は6ヵ月後も増加傾向にあり、複数の友人と交渉することが持続できていることが示された。その他の2名については、6ヵ月後には減少してきているものの、対人交渉時間が増加していることを考慮すると、特定の友人と長時間遊ぶことができているということが読み取れる。これらの結果から、いずれの対象児も対人交渉場面のポジティブな変化が明らかになり、MSSTの効果が実証されたといえよう。

なお、詳しくは平石（2005a）及び平石・塗師（2005b）を参照されたい。

(6) 今後の展望

集団SSTを算数に適用した研究結果から、適切な条件を設定すれば生活指導と教科教育が同時に効率よく行うことができるという可能性が示唆された。適切な条件とは、授業の目標が児童及び教員にとって端的でわかりやすく、かつ複数のメンバーで活動が行える教科・単元を選択するということである。さらに、教科教育での目標の獲得手順が、社会的スキルの獲得手順と同じであるように設定することで、児童は訓練と感ずることなく、教科の授業を受けることができる。そのような設定にすることで、児童は教科の授業を受けると同時に、社会的スキルも獲得できているという仕組みになっている。教員は普段の教科の授業において、当たり前のように「人の話を聴きましょう」であるとか「発表するときの声はお友だちに聞こえるように」などというように生活指導の一環となるような声かけは行っているだろう。しかし、今回紹介した算数のように集団SSTを授業に組み込み、グループのメンバーと協調しながら活動を進めていくという意図的な計画をすることで、教科教育と生活指導が効率よく同時に行うことが可能であることを実証した。

これらの結果より、他教科においても以上のような条件を設定し、プログラムを計画することができれば、道徳の時間や特別活動の時間のみならず、教科教育においても社会的スキルの獲得を目指すことができると考えられる。

5. まとめと提言

以上のように本研究では、まず小学校入学前の園児の社会的スキルが如何に未熟であるかという実態を述べ、それを踏まえた小学校における社会的スキル教育の必要性と重要性を述べた。その際、社会的スキル教育を行う時間として、「道徳」や「特別活動」（あるいは「総合的学習」）の時間だけではなく、社会的スキルの般化や維持等を考慮すると、教科教育の時間にも社会的スキル教育を組み込む必要があることを指摘した。そして社会的スキルが現行の「道徳」、「特別活動」、各教科の小学校学習指導要領にどのように記述されているかを総覧した。その結果、社会的スキル教育を組み込むのに最も適した時間は「道徳」あるいは「特別活動」の時間であること、教科の中では「伝え合う力を高める」ことが新たに目標として位置付けられた「国語」の「話すこと・聞くこと」に対して社会的スキル教育の適用可能性が非常に大きいことを指摘した。また「生活」、「体育」の学習指導要領にも社会的スキルに関連した記述が多く見られ、これらの教科の時間も社会的スキル教育を組み込みやすいことを述べた。さらに、「算数」、「社会」、「理科」、「音楽」、「図画工作」、「家庭」では、直接的に社会的スキルに関連した記述はほとんど見られないが、グループ学習等の学習活動形態の工夫により社会的スキル教育を組み込むことが十分に可能であることを述べた。次に社会的スキル教育の中でも小学校の学級場面で最も適用可能性が高いと思われる集団SSTに関する先行研究を説明し、般化や維持を考えれば「道徳」や「学級活動」の時間のみならず教科教育に集団SSTを実施することがより効果的であることを述べた。そして実際に「算数」教育に集団SSTを適用し、教科の学習目標の達成だけでなく、社会的スキルの獲得もできることを実証した実践例と研究結果を示した。この研究結果は、教科指導と生活指導を同時に効率よく行うことができるという可能性を示すものである。本研究では実践例として「算数」しか取り上げていないが、先に述べたように「算数」は学習指導要領で社会的スキルに関連した記述がほとんど見られない教科であることを考えると、「算数」でできるということは、他教科でも社会的スキル教育を組み込むことが十分

可能であることを示すものといえよう。しかしその実証的な検討は今後の課題である。なお本研究は社会的スキル教育を学習指導要領との関連で論じたので、「総合的な学習」の時間については触れなかったが、テーマの取りこ上げかたによっては「総合的な学習」の時間が社会的スキル教育を行うのに非常に適した時間であるも指摘しておきたい。

以上のことから、本研究の結論として、小学校入学前の園児や小学生の社会的スキルの憂慮すべき現状を踏まえ、可能な限り社会的スキル教育を教科教育に組み込むことの必要性和重要性を提言したい。これはいわば学習指導と生活指導を同時に行おうという欲張った構想ではあるが、本研究で示した事例から十分可能性があるものと考ええる。

文 献

- アエラ編集部 2005 父よ母よ園児が壊れる AERA 2005年9月5日号 p.31-35.
- 相川充 2000 セレクション社会心理学—20 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—サイエンス社
- 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究、49、371-381
- 後藤吉道・佐藤正二・高山巖 2001 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果 2001 カウンセリング研究、34、127-135
- 平木典子 1993 アサーショントレーニング 日本・精神技術研究所
- 金山元春・佐藤正二・前田健一 2004 学級単位の集団社会的スキル訓練—現状と課題— カウンセリング研究、37、270-279
- 小林正幸・相川充編 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化社
- 子どものコミュニケーション研究会編 2003 イラスト版 こころのコミュニケーション 子どもとマスターする49の話の聞き方・伝え方 合同出版
- 文部科学省 2004 小学校学習指導要領（平成10年12月告示、平成15年12月一部改正）
- 文部省 1999 a 小学校学習指導要領解説 国語編
- 文部省 1999 b 小学校学習指導要領解説 生活編
- 文部省 1999 c 小学校学習指導要領解説 算数編
- 中島義明他編 1999 心理学辞典 有斐閣
- 平石聡子 2005 a 算数へ適用した集団SSTの効果 (1) —遊び場面のビデオ分析を通して— 日本教育心理学会第47回総会発表論文集、266
- 平石聡子・塗師斌 2005 b 学級を対象とした友情形成スキル獲得の試み—算数への集団SSTの適用— 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集、5、81-99